

“That’s so sad, but I’m not sad about it.” と その日本語対応表現について

谷 光 生

1. はじめに

筆者のまわりの幾人かの英語母語話者に、次の英語表現 (1a) および (1b) について、「自然な意味を表しているか、矛盾を感じるか」と尋ねると、いずれの英語母語話者からも「両方とも論理的で矛盾がなく、文法的にも問題ない」という趣旨の回答が得られる。¹

- (1) a. That’s so sad, but I’m not sad about it.
b. I’m not sad about it, but that’s so sad.

また、彼らによると、(1a, b) が用いられ得る状況としては、たとえば「I」は X にずっと片思いを続けているが、X には長年の恋人 Y がいる。しかし、ある時、X と Y は破局を迎えた」というようなものである。このような状況に對しては、(1a, b) 以外にも、たとえば次の (2a, b) も問題なく用いることが可能であるという。

- (2) a. I’m not sad about that, but it’s really sad.
b. That’s really sad, but I don’t feel that way about it.

1 筆者の同僚である英語母語話者の Marianne Kimura 先生、John Campbell-Larsen 先生、Cameron Romney 先生には、インフォーマントとして貴重なご意見をいただいた。ここに厚くお礼を申し上げる次第である。

(1a, b), (2a, b) が用いられ得る状況は特殊なものではなく、一般に起こり得るものといえそうだが、そのような状況に対して、(1a, b), (2a, b) に相当する内容を日本語として表現することは可能であろうか。手始めに、(1a, b), (2a, b) に表面上、対応する日本語を用意してみる（もしくは「直訳」してみる）と、次の (1'a, b), (2'a, b) のようになるが、いずれも受け入れがたい日本語になる。

- (1') a. *それはすごく悲しいけど、僕は（それ）悲しくない（なあ）。
 b. *僕は、それ、悲しくないけど、それはすごく悲しい（なあ）。
- (2') a. *僕は、それ、悲しくないけど、それは本当に悲しい（なあ）。
 b. *それは本当に悲しいけど、僕は（それ）そんな風を感じない（なあ）。

なお、日本語母語話者の中には、「(1'b), (2'a, b) は確かに容認しがたいが、(1'a) は可能かもしれない」との判定を（一旦）下すものがある。しかしながら、そのような日本語母語話者も、(1'a) の前半部分である次の (3a) の表す意味が、実質、(3b) ないし (3c) のような意味になるはずであるとの確認を求めると、「(1'a) も容認しがたい」と判定を変える。

- (3) a. それはすごく悲しい。
 b. それは僕（は）すごく悲しい。
 c. {それ / そのこと}（について）は、僕はすごく悲しい（と感じる）。

このような誤判定は、(1'a, b), (2'a, b)（や (1a, b), (2a, b)）に対して想定される状況が容易に得られ、また一般的でもあるという言語外の要因に影響を受け、なされたものであると考えられるが、(1a, b), (2a, b) に対応する日本語表現として、(1'a, b), (2'a, b) が不可能であるとすれば、どのような日本語

表現を用いればよいのであろうか。いや、それ以前に、そもそも (1a, b), (2a, b) に対応する日本語表現は存在するのであろうか。

2. 日本語対応表現の検討

前節で、(3a) は (3b) ないし (3c) の意味を表すはずであるとしたが、このことは、英語と異なり、日本語では、〈悲しみ〉を感じる主体が「僕」で表されるような〈私〉に限られることを確認したものであるといえる。この点は、いわゆる主観的表現に関するこれまでの日英語対照研究の多く（たとえば、大江 (1975)、澤田編 (2011)、中村 (2019)、廣瀬 (2024) など）が指摘するところであるが、関連のデータをあらためて示せば、次のようになる。

- (4) a. { I’m / I feel } so sad.
 b. My colleague { is / feels } so sad.
- (4’) a. 「僕 / 私」はすごく悲しい。
 b. *同僚の田中さんは（両親を亡くされ）すごく悲しい。

英語では、(4a, b) のとおり、〈私〉に対応する “I” のみならず、〈第三者〉である “my colleague” も〈悲しみ〉の主体として表現され得るが、日本語では、(4’a, b) のとおり、〈悲しみ〉の主体は〈私〉に対応する「僕」や「私」のような表現に限られ、〈第三者〉である「同僚の田中さん」のような表現は（通常）許されない。日本語で〈第三者〉が〈悲しみ〉の主体として表現される場合、次の (5) のように、「悲しそう」が用いられる。

- (5) 同僚の田中さんは（両親を亡くされ）すごく悲しそうです。

なお、「悲しい」のような主観的表現に関するこれまでの研究では、日本語

においても〈第三者〉を主体とすることが可能であるかのようなデータが示されることがあるが、この種のデータの取り扱いには慎重を期す必要がある。というのも、〈第三者〉が主体として可能とされる場合は、〈私〉の持つ〈第三者〉への「支配力」とでもいふべき言語外の要因が大きな影響を及ぼしているからである。

たとえば、小説家が小説を書く場合、小説内の登場人物はその行動はおろか思考過程においても、〈私〉である小説家の思いのままに操ることが可能であり、〈私〉の及ぼす〈登場人物〉への支配力は絶大なもの、もしくは絶対的なものとなる。換言すれば、小説家である〈私〉は、自身の小説内の〈登場人物〉の行動や思考に対して、いかような判定も下すことができる。また、〈親〉が及ぼす自身の〈子〉に対する支配力や、〈芸能人のマネージャー〉が及ぼす、担当の〈タレント〉に対する支配力も、相当に大きなものとなる場合があり、〈親〉や〈芸能人のマネージャー〉が〈子〉ないし〈タレント〉に対して、いわば独善的な判定を下すこともある。このため、次の(6a, b)のような文は、〈第三者〉の〈悲しみ〉であっても、〈私〉の支配力に応じてその〈悲しみ〉が断じられ、表現され得ることになると考えられる。

- (6) a. こうして、惨劇はついに幕を閉じた。金田一耕助は悲しい——
やりきれない気持ちを、どうしても拭い去ることができない。²
b. うちの {子/タレント} は、悲しいんです。

(4b) ならびに(5)で確認したとおり、日本語においては、〈第三者〉の〈悲しみ〉を「悲しい」という単純な形式で表すことはできないが、その理由は(4b)に意味的逸脱(semantic deviance)が生じているためと考えられる。(すなわち、「悲しい」はあくまで〈私が悲しい〉という意味しか表さず、〈第三者〉の〈悲しみ〉を「悲しい」で表現することはできないということ。)もしそうである

2 (6a)は筆者(本稿執筆者)による作例で、小説家・横溝正史による金田一耕助シリーズの小説の中で用いられそうな文を想定の上、作成した。

なら、(6a, b) には——(4’b)と同様に——意味的逸脱が生じていることになる。(6a)は「小説言語」として誰もが受け入れざるを得ないほどに慣習化されたものであるため、その意味的逸脱がほぼ感じられないが、(6b)は個人によりその使用実態が異なり、(6b)を使用しない話者は、意味的逸脱が感じられるゆえ使用しない、といえよう。³

このことに関連して、事実を一つ付け加えると、(4’b)に断定表現「(の)です」を付け加えると、〈私〉の支配力の及ばない〈第三者〉に〈私〉の独善的な判断が下されているとことが明瞭に示されるため、その容認可能性はさらに低くなる。次の(7a)と(7b)を対比されたい。

- (7) a. *同僚の田中さんは(両親を亡くされ)すごく悲しい。(= (4’b))
 b. **同僚の田中さんは(両親を亡くされ)すごく悲しい(の)です。

議論を(4), (4’)に戻すと、日本語では(少なくとも)「悲しい」のような主観的表現については、〈私〉を主体としたものしか容認されないという事実から、そもそも“I”を主体とする英語の(4a)と、「僕」ないし「私」を主体とする日本語の(4’a)は、その表す意味が異なると敷衍できそうである。すなわち、日本語においては、〈私〉の判断が文全体において常に表されると同時に、「悲しい」といった述語の意味構造(ないし語彙意味構造)においても〈私〉が常に存在するが、その一方の英語においては、〈私〉の判断が文全体で表されることもなければ、“sad”のような述語の意味構造にも〈私〉は存在しないということである。

この辺りの事情を図示すれば、次の(8), (9)のようになるが、外側の四角カッコに付与された下付きの〈 〉は文全体の判断が〈私〉のものであるかそうでないかを示し、内側の四角カッコに付された下付きの〈 〉は述語の意味

3 二十名ほどの日本語母語話者に(6b)を使用するかどうかまた容認可能かどうか尋ねてみると、「使用しないが、容認できる」「使用しないし、容認もできない」と回答するものが、半数ほど認められた。

構造において〈私〉が存在するかどうかを示すものである。

- (8) a. [_(私) φ [_(私) すごく悲しい]]
 (cf. すごく悲しい。)
- b. [_(私) 僕 / 私 [_(私) すごく悲しい]]
 (cf. {僕 / 私} はすごく悲しい。)
- c. * [_(私) 同僚の田中さん [_(私) すごく悲しい]]
 (cf. *同僚の田中さんはすごく悲しい。)
- (9) a. [_() I [_() so sad]]
 (cf. {I'm / I feel} so sad.)
- b. [_() my colleague [_() so sad]]
 (cf. My colleague {is / feels} so sad.)

日本語の (4'b) が容認されないのは、(8c) の意味構造に示されるとおり、〈私の悲しみ〉を表すはずの「悲しい」が〈同僚の田中さん〉に対して叙述されているという、〈私〉の矛盾した判断がなされているためである。それに対し、英語の (4b) が容認されるのは、その意味構造上、どこにも〈私〉の存在が認められないからである。

なお、英語の意味構造一般においては〈私〉という意味要素が存在しないと見えるが、外界世界に存在する（はず）の私である個人を指示する意味要素は、たとえば (9a) の〈I〉に示されるとおり、当然ながら、表示されることが多々ある。

また、英語の意味構造一般において、〈私〉という意味要素が存在しないからこそ、(9b) のような〈第三者〉の〈悲しみ〉を意味的逸脱なしに表すことが可能になっていると考えられる。

さらには、英語では、次の (10) のように、〈第三者〉さえ示されず、形式主語の it が用いられた「客観的」な表現も可能であるが、これも英語の意味構

造において、〈私〉という意味要素が存在しないからこそのものであると考えられる。

- (10) a. (Generally,) it’s so sad.
 b. (Generally,) it feels so sad.

日本語においては、常に〈私〉という意味要素が存在するため、(10)に示されるような客観性を表すことは、次の(11a, b)に示されるとおり、困難であり、(11c)のように、〈私〉の推測にもとづく判断を表すことしかできない。

- (11) a. * その状況は、一般的に大変悲しい。
 b. ? その状況は、一般的に大変悲しいといえる。
 c. その状況は、一般的に大変悲しいといえそうである。

先に確認した(4'b)と(5)の対比についても、この(11a, b)と(11c)の対比と同様の説明が当てはまる。

さて、以上を鑑みると、(1a, b), (2a, b)の英語表現を日本語で表現することは不可能であり、対応する日本語表現は存在しないといえそうである。というのも、訳出の仕方を多少変えたところで、日本語の意味構造においては、結局〈私は悲しい〉と〈私は悲しくない〉が並存することになり、矛盾が生じるからである。この辺りの事情は、次の(12)に示されるとおりである。

- (12) a. * それはすごく悲しいけど、僕は(それ)悲しくない(なあ)。
 (= (1'a))
 b. * その状況は大変悲しいけれど、私は悲しくない。
 c. * [_{〈私〉} それ / その状況 [_{〈私〉} すごく / 大変悲しい]]
 & ¬ [_{〈私〉} 僕 / 私 [_{〈私〉} 悲しい]]

一方、英語においては、次の(13)に示されるとおり、〈私〉という意味要素が存在しないため、客観性が担保されると同時に、矛盾が生じることもない。

- (13) a. That's so sad, but I'm not sad about it. (= (1a))
 b. [_κ] that [_κ] so sad]] & ¬ [_κ] I [_κ] so sad]]

3. 類例の提示

紙幅の都合上、以下、事実を指摘する程度のことしかできないが、(1a, b), (2a, b)に類する英語表現は、次の(14)から(17)に示されるとおり、他にも多く観察される。⁴

- (14) a. It's hot (in) here, but I'm not hot.
 b. (?)I'm not hot, but it's hot (in) here.
- (15) a. That was really scary, but I was not scared.⁵
 b. (?)I wasn't scared of that, but it was really scary.
- (16) a. The topic is very interesting, but it doesn't interest me.
 b. (?)The topic doesn't interest me, but it's very interesting.

4 複数の英語母語話者から、「(14)から(17)における(a)は問題ないものの、(b)の容認可能性はやや低くなる」との趣旨の情報提供を受けている。なぜこのような容認度の差が生じるのかについて、その詳細は不明であるが、(a)のように、一般的な状況を先に提示したあと、個別の事情を提示するという情報の流れが、語用論上自然であるということが関連するのかもしれない。

5 英語母語話者によると、次のような英語表現も可能とのことである。
 That was really scary, but it didn't frighten me.

- (17) a. The situation was quite embarrassing, but I was not embarrassed.
 b. (?)I was not embarrassed, but the situation was quite embarrassing.

このような英語表現に対応する日本語はやはり存在しないといえるが、この点について、(14a, b) のみを取り上げ、手短かに確認する。(14a, b) に対応させた日本語表現は、たとえば次の (14'a, b) のようになるが、いずれも受け入れがたい。

- (14') a. *ここは暑いけど、僕は暑くない (よ)。
 b. *僕は暑くないけど、ここは暑い (よ)。

というのも、(14'a, b) のいずれにおいても、その意味構造は結局 〈私は暑い〉と 〈私は暑くない〉 が並存する形になるからである。なお、(14'a) の前半部分ならびに (14'b) の後半部分にあたる「ここは暑い」は、次の (18a) に示されるとおり、「ここは (よそと異なり) 私は暑く感じる」、すなわち 〈私は暑い〉ということを表し、(18b) に示されるような、英語の “it’s hot (in) here” がもつ客観性は表されていない点に注意されたい。

- (18) a. [_(私) ここ [_(私) 暑い]]
 b. [_() it [_() hot]]

4. おわりに

本稿は、(1a, b), (2a, b) の英語表現 (ならびにその類例となる (14) から (17) の英語表現) に対応する日本語表現が存在しないのことを主張したものであるが、その背後には、(8a), (9a) にかがえるとおり、そもそも “I’m sad.” や

「(僕は) 悲しい。」のようなごく単純な表現についても、〈私〉の存在・非存在という点において日英語の意味構造が異なるというより基本的な仮説が想定されたものとなっている。

この基本的仮説については別稿で論じるしかないが、それ（に類似したもの）を認めざるを得ないことは、たとえば次のような日英語表現の比較からも明らかではないであろうか。

- (19) a. 初めに、神は天地を創造された。
b. In the beginning was the Word.

- (20) a. 初めに言^{ことば}があった。
b. In the beginning was the Word.

上の日英語表現のうち、(19a, b)は『旧約聖書』所収の「創世記」冒頭からのもので、(20a, b)『新約聖書』所収の「ヨハネによる福音書」冒頭からのものである。(19a), (20a)の日本語を読む限り、「誰が天地創造を見て、誰が言葉の存在を確認したのだ?」という疑問がすぐに浮かび、それと同時に、(19a), (20a)が言わんとすることとは逆の「神以前に、あるいは神とともに、誰かがいたのだ」という含意相当のものも得られる。このような事態が生じる理由は、日本語の意味構造には必ず〈私〉という意味要素が存在し、その〈私〉が外界世界の、〈私〉に対応するはずの存在物を前提とすることになるからである。一方、(19b), (20b)の英語には、その意味構造において〈私〉が存在しないため、(19a), (20a)の日本語にたゞよう「嘘くささ」は感じられない。

(19a, b)の意味構造を表せば、おおよそ次の(19'a, b)のようになるが、そこにも示される〈私〉の存在・非存在という意味構造に関する基本的仮説を認めない限り、(19), (20)に見られる根本的な日英語の相違はうまく捉えられないものと考えられる。

- (19') a. [_(私) 初めに、神は天地を創造された]
b. [_(く) In the beginning was the Word]

参考文献

- 大江三郎. 1975. 『日英語の比較研究—主観性をめぐって—』南雲堂：東京.
澤田治美(編). 2011. 『主観性と主体性』ひつじ書房：東京.
中村芳久. 2019. 『認知文法研究—主観性の言語学—』くろしお出版：東京.
廣瀬幸雄. 2024. 『自分の言語学』開拓社：東京.